

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北東インドの歴史：古代からビルマ戦争まで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003705

1. 北東インドの歴史

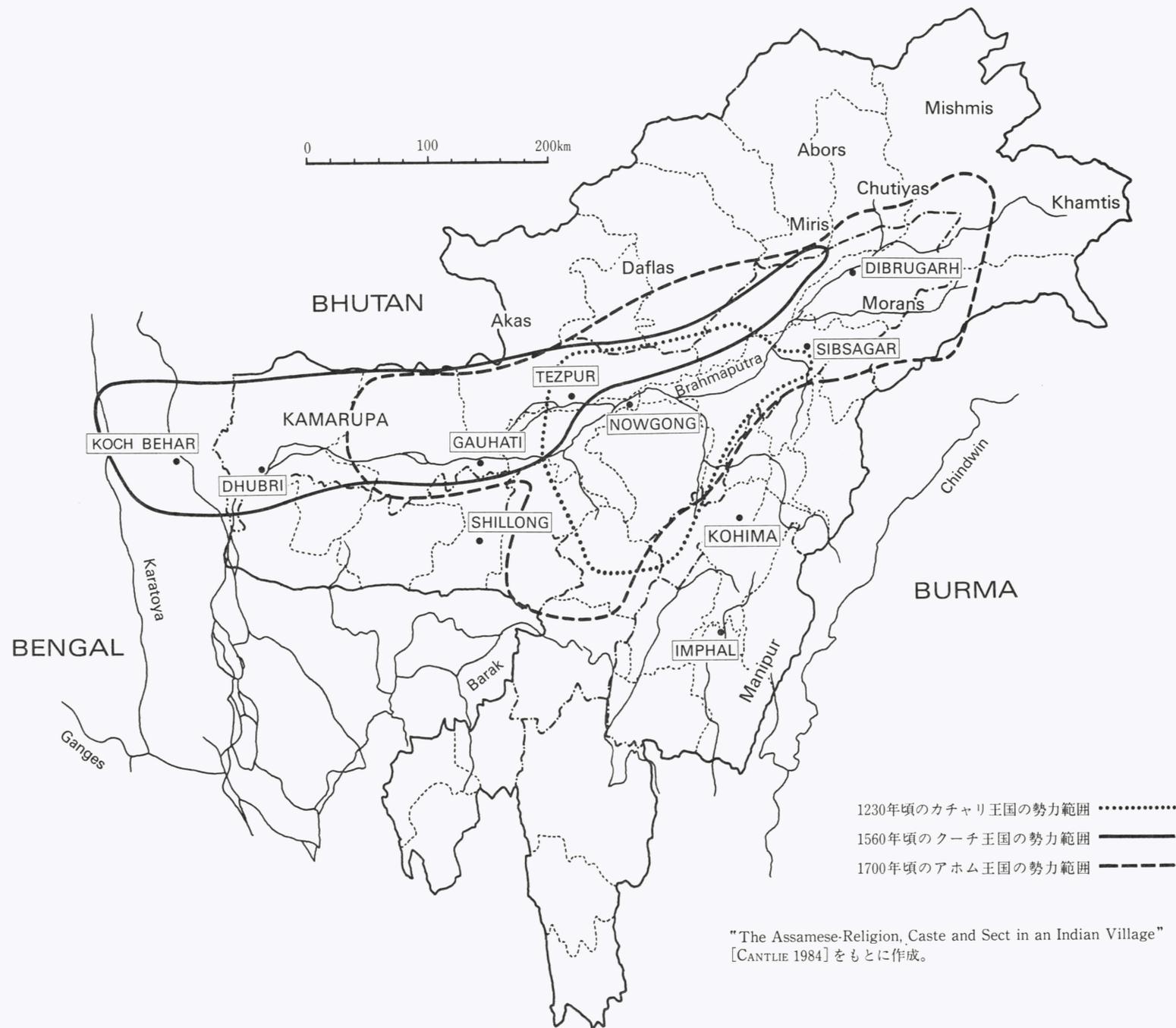


図 3 北東インドの歴史地図 (1)
 カチャリ王国, クーチ王国, アホム王国の最大勢力範囲

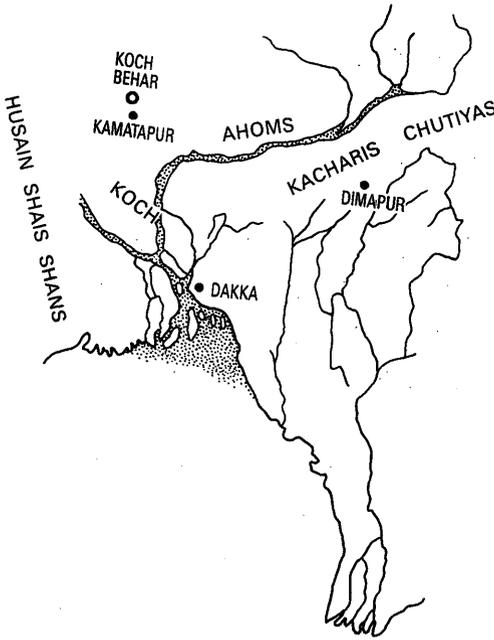


図4. 北東インドの歴史地図 (2)
16世紀前半のアッサム

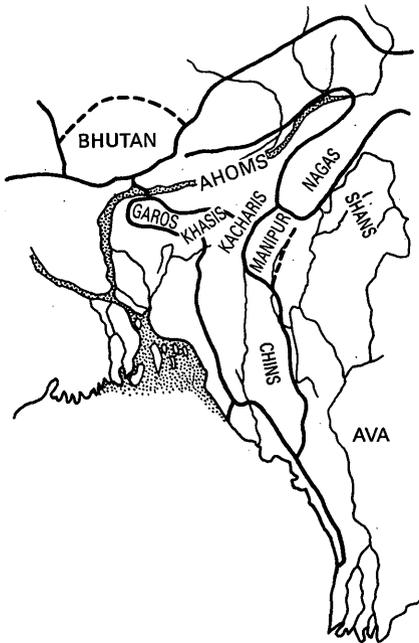


図5. 北東インドの歴史地図 (3)
17世紀前半のアッサム

"A Historical Atlas of South Asia"
[Schwartzberg 1978]をもとに作成。

古代からビルマ戦争まで

北東インドの歴史を最も古くから開けたブラマプトラ (Brahmaputra) 川の流域のアッサム地方を中心にして見ることにする。

アッサムの歴史は、大きく、(1)先史時代、(2)伝説時代、(3)アホム王国時代、(4)近代の四つに分けることができる。ビルマ戦争以降については、栗田が記述をおこなうので、ここでは、(1)、(2)、(3)について記述する。

最も初期に、現在、総称的に北東インドとよばれる地方にきたのは、ネグリート人種で、ナガランドに住むアンガミ・ナガ (Angami Naga) の人達であるといわれている。次に新石器時代には、原オーストロイド系の人種、カーシ (Khasi) 族、シンタン (Synteng) 族、ムンダ (Munda) 族、サンタル (Santal) 族の人々がやってきた。3番目に、バルチスタン (Balchistan) をとおって、ドラヴィダ系の人々がやってきた。アッサム地方におけるリンガ・ヨニ (Linga Yoni 男根女陰) 信仰は、このドラヴィダ系の人々の影響を受けているといわれる。

ドラヴィダ系の人々のあとに、北方および北東から、モンゴロイド系の人々がやってきた。紀元前1000年以前には、すでに移住してきたといわれている。1つは、グレート・ボド (Great Bodo) グループがブラマプトラ川流域に進出した。このグループには、カチン (Kachin) 族、ガロ (Garo) 族、ラブハ (Rabha) 族などが含まれる。もうひとつには、アボール (Abor) 族、アカ (Aka) 族、ダフラ (Dafla) 族、ミリ (Miri) 族、ミシュミ (Mishmi) 族などの北アッサム群のグループが、ブラマプトラ平原の北方地域に広がった。さらに、ナガ (Naga)、クキ (Kuki)、ミキール (Mikir)、ミゾ (Mizo) 族などのナガ諸族およびクキ・チン諸族も、現在のナガランド、マニプール地方に進出した。

いちばん最後にアッサムにやってきたのが、アーリア系の人種である。北東方向から、紀元前6世紀から7世紀頃にやってきたと信じられている [DUTTA 1982: 3-6]。

紀元4世紀以前は、文献的な資料は得られず、伝説的な時代である。それ以降の歴史も、アホム (Ahom) 族の侵入以前は、古代の碑文や旅行者の記録から、わずかに知られるだけである。アホム族がアッサムを支配していた600年間は、アホム語で書かれた歴史に関する文献ブランジ (buranji) によってそのころの歴史が知られる。18世紀から19世紀には、ウェルシュ (C. Welsch) 大尉、ハミルトン (B. Hamilton)、イギリス領期には、ゲイト (E. A. Gait)、マッケンジー (A. Mackenzie) などの軍人、探

検家、行政官などが記録をのこしている [BARUAH 1985: 28-57]。

アッサムは、古代においては、初期にはプラジョーテシャ (Pragjyotisha), のちにはカーマルーパ (Kamarupa) として知られた。古代叙事詩『マハーバーラタ (Mahabharata)』によれば、プラジョーテシャ王国の領域は、西の国境は、カラトヤ (Karatoya) 川, 南の国境は、ベンガル湾であったという。プラ (Prag) は、「構成者, 東方」を意味し、ジョーテシャ (Jyotisha) は、「1つの星, 占星術, 輝く」などを意味する言葉である。カーマルーパという名前の起源は、シヴァ (Shiva) 神と関連づけられている。シヴァ神は、妻のサティ (Sati) 女神を失った悲しみで、彼女の死体を頭にのせて放浪した。ヴィシュヌ (Vishnu) 神が、これをやめさせるため、彼女の死体を円盤で粉々に砕いてしまった。シヴァ神は、なおも苦行をつづけたので、他の神は、カーマデーブ (Kamadeve) という愛の神をおくり、再び恋におとし入れ、苦行を破らせようとした。そのたくらみは成功したが、シヴァ神は腹をたててカーマデーブをやきつくした。これがおこなわれた場所がカーマ (愛), ルーパ (姿) であるといわれている。

カーマルーパ王として最初にあげられているのは、マヒラン・ダーナブ (Mahirang Danava) と称するもので、以下、ハタック・アスル (Hatak Asur), サムバラ・アスル (Sambara Asur), ラトナ・アスル (Ratna Asur) とつづく。そのなかでも、ナラク・アスル (Narak Asur) というものが有名である。アスルという名前から彼らは非アーリア系であるといわれている。ナラクは、ヴィシュヌ神の力によって大地から誕生し、ヴィデハ (Videha) すなわち、北ビハール王のジャナカ (Janaka) に育てられた。彼は、プラジョーテシャ浦を都と定め、カマキャ (Kamakhya) に多数のパラモンを居住させた。彼の支配地域は、西はカラトヤ川から、東はデクラーン (Dikhurang) 川までおよび、ナラクはのちにヴィシュヌの化神クリシュナによって殺されたという [GAIT 1905: 10-17]。

4世紀の中頃、グプタ王朝がインド半島に勢力を及ぼしていたころ、プラジョーテシャ・カーマルーパは、マハーバーラタ戦争につづく長い忘却の時代のあとに、ヴァルマン (Varmans) とよばれる新しい系統の王のもとに再び勃興した。ヴァルマンの支配は3世紀ほどつづいた。プシュヤ・ヴァルマン (Pushaya Varman) がこの系譜の創始者である [GAIT 1905: 22-23]。中国の僧、玄奘が7世紀中頃、カーマルーパをおとずれており、『大唐西域記』にその頃のカーマルーパの街と人々の様子がしるされている。

「迦摩縷波国は周囲一万余里ある。国の大都城は周囲三十余里ある。土地は低湿で、

農業は時に応じ適切に行なっている。般婁娑果・那羅鷄羅果はその樹木が多いけれども一層珍重されている。河川や湖沼は町や村を取り巻いている。気候は穏和で、風俗は質朴である。人の形姿は小さく、容貌は黄黒い。言葉は少しく中印度とは異なっている。性質は甚だ荒々しく、志向は勉学に熱心である。天神を尊び仕え、仏法を信じない。それ故に仏の出世より今日に至るまで、伽藍を建てたこともなく僧侶を招き集めたこともなく、信仰をもっている人があっても心ひそかに念じているだけである。天祠は数百、異道の人々は数万人いる。

現在の王はもともと那羅延天の子孫で婆羅門の種族である。字は婆塞羯羅伐摩（原注 唐に日胃という）、号は拘摩羅（原注 唐に童子という）である。この境域に拠ってから代々君臨し、現在の王に至るまで千世を経ている。君主は学芸を好み、庶民はその化に従い、遠方の才能高き人々も、その風教を慕い遊学している。あまり仏法を信じないけれども、学高き沙門は尊敬している。」[玄奘 1971 (642): 314-315]

バハースカラ・ヴァルマン (Bhaskara Varman) は、プシュヤ・ヴァルマンの11世の孫であるが、ハルシャ・ヴァルダナ (Harsha Vardana) の招きに応じて、カーマルーパに滞在していた玄奘とともに、カナウジでおこなわれた集会へ参加した。バハースカラ・ヴァルマンの治世は、650年くらいまでつづいた。そののちは、「ムレッチャの大酋長」なるサーラ・スタムバハ (Sala Stambaha) に政権を奪われた。しばらくは、スタムバハ王朝がつづいたが、800年頃には、プララムバハ (Pralambha) 王朝が勃興した。しかし、これも短命におわり、1000年頃には、ブラマ・パール (Brahma Pal) をはじめとして、パール (Pal) 王朝がおこった。ラトナ・パール (Ratna Pal)、ヴァイデヤ・デブ (Vaidya Deb) と1133年までつづいた。12世紀の初期に、パール王朝が倒れたあと、カーマルーパの強力な王国は途切れてしまった。ヴァイデヤ・デブは、カーマルーパ王国の東部を支配できなかったし、パール王朝の最後の王が死んだあとは、小独立国が割拠していた。ブーイヤー (Bhuiya) という一群が、各地で王のようにふるまい、王国の西部でカーマルーパという名前を維持していた [Gait 1905: 30-42]。

おなじ頃、プラマプトラ川の上部では、チュティヤ (Chutiya) とカチャリ (Kachari) が巨大な勢力を誇っていた。チュティヤ族は、モンゴロイド起源で、彼等の固有の言語は、ボド語に近いといわれる。もともとは、動物や人体の供犠をおこなっていたが、アホム王によってこの慣行はやめさせられた。ブランジ文献によると、12世紀初頭から16世紀初頭にかけて、10人の王が数えられるという。16世紀にチュティヤ族は、アホム族によってほろぼされた [Gait 1905: 41-43]。

13世紀の始めにアッサムの歴史上、2つの大きな出来事がおこった。1つは、ベンガルのトルコ・アフガン系の支配者が西から侵略してきたこと、もう1つは、タイ(Thai)系の人々によって王国がつけられたことであり、彼等は、プラマプトラ川の南東部で、アホムとして知られるようになった。一方で、カーマルーパの支配者たちは、彼等の領土と権力を失っていき、ついには、土地の所有者となったタイ系のグループに征服されてしまった。古代カーマルーパ王国の西部は、カーマタ王国と名を変えて存続していた。14世紀はじめのカーマタ王国の王、プラタップ・ドフラジ(Pratap Dhraj)とアホム王が戦った記録がブランジ文献にかかれてあり、最終的には、カーマタ王が娘をさしだして、和平を請うたという。

カーマタ王国の力が弱くなるにつれ、数多くのブーイヤーの中で強力になったケーン(Khen)という一族が、王国全体に力を及ぼすようになった。ケーン族がどういう民族であるかは知られていない。首都はカーマタプールにあり、その領土は、東はバル・ナディ川、西はカトラヤ川に及んだという。15世紀のなかばに、回教徒の侵入により、ケーン王朝は滅亡した。しかしながら、カーマタ王国に成立した回教徒の支配は、長くはつづかなかった。ブーイヤーの新たな勢力の台頭の前にほろんだのである。これにつづいて、アッサムの西の地域では、もう一度、モンゴロイド系の人々が力をもつようになった。これらは、クーチ(Koch)とよばれる[BARUAH 1985: 201-203]。

クーチ族は、メチ(Mech)族やガロ(Garo)族ときわめてよく混血したモンゴロイドであるといわれている。1515年頃、一大勢力となったビス・マンダル(Bisu Mandal)は、ヒンドゥー教の保護者として、ビスヴァ・シン(Bisva Singh)と名のり、シヴァ神やドゥルガ神を崇拜した。1540年ごろ、あとをついだナル・ナラヤン(Nar Narayan)は、1546年、1547年にアホム軍と戦い撃退した。また、カチャリ族、マニプール王も屈伏させた。ジャインティア、ティッペラ、シレットの地域も攻撃し、征服した。回教徒とも2回、戦闘を交えたが、いずれも敗北した。ナル・ナラヤンは、多くの戦争をおこなったが、学問の保護者でもあり、ヴァイシュナヴァ派の多くの讃歌も彼の時代につくられ、寺院や道路の建設などの土木工事を完成させた。

1581年に、内粉がおこり、クーチ王国は2つに分裂した。すなわち、ナル・ナラヤンは、サンコッシュ川以西を自分の領土とし、甥のラグフ・デブ(Raghu Deb)にその川の以東を与えた。前者はクーチ・ビハール(西クーチ王国)、後者はクーチ・ハージョ(東クーチ王国)とよばれた。ムガル帝国とアホム王国が、クーチ族の領土をたびたび脅かしたので、1638年には、東クーチ王国のバルディ川以西は、ムガル帝

国、のこりはアホム王国の支配下におかれた。西クーチ王国は、回教徒の一諸侯として存在した [GAIT 1905: 206-219]。

13世紀前後に成立するアホム王国、カチャリおよびジャインティア王国、マニプール王国については、月原、人見、八木がそれぞれ各部族の民族誌のなかで記述しているので、ここでは簡単にふれるにとどめる。

アホム族の祖先は、13世紀初頭にブラマプトラ河谷の東端に移動してきたといわれ、ビルマのシャン人の一種ともいわれる。アホム族の僧や貴族たちが、ブランジという年代記録をのこしている。それによると、スカパー(Sukapha)は、1215年に9,000人の男女とともにマウルンを出立し、1238年にガムシャーに到着、ブラマプトラ河谷を下降していった。その間、付近のナガ族を降伏させた。1268年に、息子のステウパー(Steupha)が王位を継承し、以下、その息子たちが即位した。2度の空位時代をはさみ、1397年に、スダーンパハー(Sudangpha)が即位した。彼は、バラモン(婆羅門)に育てられたので、彼の時代にバラモンが勢力を拡張した。1448年に即位したスヘンパー(Suhenpha)は、ナガ族やカチャリ族と戦い、敗北した。以降も、チュティヤ族、カチャリ族との戦いが繰り返され、16世紀には、チュティヤ族を滅ぼした。

15世紀の中頃から、ムガール帝国の回教徒との戦いが本格化する。1681年に即位したガダーダハル・シン(Gadadhar Singh)は、ムガール軍に奪われていたガウハティの都を奪還した。これが、回教徒との最後の戦いであり、マナス川が両者の国境線となった。1706年に、カチャリ族が、宗主国であるアホム王国に独立を宣言し、進入してきたので、アホム軍もむかえうち、ついにカチャリ王を捕えた。つづいて、カチャリ王が、援助を請うたジャインティア王国にも進撃し、ジャインティア王を捕えた。1708年、アホム王国は、カチャリおよびジャインティア王国を併合した。また、1758年、1765年に、ダフラ族、ミキール族がそれぞれ侵入してきたのを撃退した。

1789年ガウリナータ・シン(Gaurinath Singh または Singha)王のときに、モアマリア(Moamaria)というヒンドゥー教の一宗派の叛乱がおこり、ガウリナータ王は、ガウハティに逃亡した。ガウリナータ王は、マニプール王に援軍を請うたが、マニプール軍は、モアマリア軍が近づいてくると逃亡した。ガウリナータ王は、イギリスに援助を求め、1792年、イギリスは、ウェルシュ大尉を指揮官として軍隊をゴアルパラに派遣した。ウェルシュ大尉の軍隊は、上部アッサムにも進撃して、鎮圧したが、1794年にイギリス軍がひきあげるとアホム王国は混乱におちいった。1816年には、ビルマ人が進入してきて、1819年から1824年までは、ビルマ人による統治時代となった [GAIT 1905: 164-258; BARUAH 1985: 220-239]。なおこの項に関しては、栗田

の記述を参照されたい。

カチャリ族は、もともとプラマプトラ河谷の原住民で、クーチ族やチュティヤ族、ガロ族、ティッペラ族とも近い関係をもつといわれる。13世紀には、プラマプトラ川の南岸に沿い、デクー川からカラン川まで、あるいはダーンシリ河谷および北カチャール地域を領土としていた。13世紀のおわり、デクー川の東に住んでいた人々がアホム軍の進出にあって撤退した。しかし、1490年までは、このデクー川がアホムとカチャリの国境線を形成していた。1526年、1531年にカチャリ王国は、アホム王国と戦い、敗北した。首都ディマプルまでアホム軍は進撃した。ディマプルが破壊されたのち、カチャリ族は、マイボンに都を定めた。しかし、16世紀なかば、ここをクーチ王に撃破された。17世紀までにカチャリ王は、ノウゴン (Nowgong) 地方の大部分と北カチャール山地を領有し、徐々にその支配をカチャール平原におよぼしていった。

1790年に即位したクリシュナ・チャンドラ (Krishna Chandra) 王の時代に、ヒンドゥー教に改宗し、王はクシャトリア階級であると称した。1813年にクリシュナ王の息子、ゴービンド・チャンドラ (Gobind Chandra) が次に即位したが、前王の部下が叛乱をおこし、また、1818年には、マニプル人の侵入をうけた。ゴービンドは、ビルマに援助を頼んだ。やがて、イギリスとビルマの間に戦争がはじまり、1824年に、イギリスとのあいだに締結された条約により、ゴービンド・チャンドラは、カチャールの王に復帰するとともに、東インド会社に隷属することとなった [Gait 1905: 299-310]。

ジャインティア王の統治領域は、2つの異なる地方からなり、1つはシンタン (Synteng) 族の住むジャインティア山地、もう1つはこの山地の南で、現在ジャインティア地区と呼ばれる平原地方であった。どちらの住民もカーシ (Khasi) 語を使用していた。ジャインティア山地がこの王国の原住地であり、紀元1500年頃に国家を形成したといわれている。パルバット・ラーイ (Parbat Ray) からはじまる王の名前がすべてヒンドゥー名になっているところから、バラモンの影響下におかれていたと考えられている。16世紀なかば、クーチ族によってジャインティア王が撃破され、17世紀初め、ジャインティア王国は、カチャリ王国に侵入され、カチャリ王国の一属国となった [Gait 1905: 311-320]。

マニプル王国を形成したメイテイ (Meitei) 族の祖先は、13世紀から14世紀に中国の北西境からやってきたといわれている。彼らは、モンゴロイド系の人種で、言語はクキ族に近い。マニプル年代記によれば、紀元30年にさかのぼる資料があるが、18世紀になるまでは、書かれている記事は散発的で伝説的である。1714年にガーリ

ブ・ナワーズ (Garib Nawaz) が即位し、1725年から1749年にかけて、ビルマ人に戦争をしかけた。ナワーズは息子によって殺され、内乱がおこり、マニプール王国は、急速に衰退していった。1755年と1758年にビルマ人の侵入をうけ、イギリスに援助をたのんだ。1752年にジャイ・シン (Jai Singh) 王は、失地回復のために、イギリスと条約をむすんだが、王の死後、兄弟が王位継承をめぐる内紛状態となった。1823年に、ピタムバル・シン (Pitambar Singh) という王の一族が、マニプールに侵入して、ビルマ人を追い払って自ら王を名乗った。ピタムバル・シンをガンビール・シン (Gambhir Singh) が撃破したが、最終的には、イギリスとビルマの間にむすばれた1826年のヤンダボ条約によって、彼の王としての地位が確定された [Gait 1905: 321-331]。

(八木祐子)